

むかし。

ある男の人が、友だちと、山へ栗くり拾いに出かけました。すると、きのこもたくさんあったので、栗やきのこをどっさり取りました。そのうち、日が暮くれかかって来ました。友だちは、「おれ、帰る」といって、先に帰りました。けれども、男の人はよくばって、いつまでも、栗を拾ったり、きのこを取ったりしていました。

やがて、男の人は、家に帰ろうと思って、山を下って行きました。ところが、そのときには、あたりはまっくらになっていて、道に迷まよってしまいました。すると、ちょうどそこへ、若い娘がふたり、ちようちんをさげてやって来ました。男の人は、
(ああよかった) と思って、

「おれ、道に迷ってしまったんだ」と、娘たちに声をかけました。すると、娘たちは、「どうもそうだと思った。あんた、これから家に帰っていては、おそくなるから、おらたちの家に泊とまれ」といいました。男の人は、助けの神だと思よこんで、娘たちに付いて行きました。

家に着くと、山の中なのにまあ、お酒だの、さしみだの、ごちそうがいっぱい出て、つばなふとんに寝かせてくれました。

朝になって、男の人は、なんだか寒いなあと思って目が覚めました。見ると、男の人は、彼岸花がさきほこっている中に寝ていました。

きつねに化ばかされたんだということです。

おしまい

村上郁再話

資料『梁川町史』梁川町郷土史研究会